



馬耳東風

今年8月14日知床の羅臼岳からの下山中に20代男性がヒグマに襲われ死亡する事件が発生した。知床が世界遺産に登録されて以降、登山者がヒグマに襲われ死亡したのは今回が初めてだそうだ。何が原因となったのだろうか？もともと知床周辺には400～500頭のヒグマが生息し、その生息密度は高く、知床五湖を巡るバスからも親子連れのヒグマが見られるとのこと。襲われた登山者をヒグマが藪の中に引き込むのを友人が目撃していた。翌日死体で発見され、周辺にいた3頭の親子ヒグマが駆除された。北海道立総合研究機構が駆除された3頭について肝臓などのDNA型を鑑定した結果、母親のヒグマと死亡した男性の衣類に付着していたヒグマの体毛のDNA型が一致し、子熊のDNAとは一致せず、男性の衣類から他のヒグマの体毛が確認されなかったことから、このヒグマが男性を襲ったと断定された。おそらく母ヒグマは、偶然遭遇した登山者から子熊を守るために襲ったと推定されている。

私は、たまたまこの事件の20日前に羅臼岳に登山し、事件のあった登山道を走っている。岩尾別温泉の登山口から1時間ほど登った地点で、アリの巣が多くヒグマがアリを食べに来る所とのことで、私たちのツアーのガイドさんもよくここでヒグマを見かけると話してくれた。羅臼岳の登山用地図にも「ヒグマとの遭遇頻度が高い」と書かれている場所である。私たちのツアー14名にはガイドさんが2人付いてくれており、そのうち一人が北海道在住のガイドさんであった。彼は、30分に1回オオカミの鳴き声を模して叫んでくれていた。彼曰く、オオカミが

生存していた時代ではヒグマの天敵であり、ヒグマを追い払う最上の手段である。自分の声は1km離れたヒグマに届いており、山では1km進むのに約30分かかるので、30分ごとに声を出しているとのこと。おかげで私たちはヒグマに遭遇することなく安全に登下山できた。

ところで、今回の事件のヒグマの親子はなぜ死体の付近にいたのであろうか？北海道の友人に勧められた本にその手がかりを見付けた。西村武重著「ヒグマとの戦い—ある老狩人の手記」(山と渓谷社)には、ヒグマは襲った人間の内臓をまず食べ、翌日には筋肉を食べ、その残骸に青草や土をかけて隠すことである。残りをタカやカラスに横取りされないように用心しての行動らしい。また、馬牧場で何頭もの馬が襲われたが、ヒグマを見付けることができなかつたため、その馬の死骸にストリキニーネを仕込んだところ、1週間後にヒグマの死体が発見された。このようにヒグマは自分の獲物の近くに潜み、日数をかけて食べる習性があるとのことである。今回の登山者がヒグマに食べられていたかは不明であるが、自分が取った獲物を確保するため近くにいたのだろう。

凶暴なヒグマとして有名だった牛喰いヒグマOSO18などは特殊な例であり、多くのヒグマはおとなしく、むしろ人間を怖がっている動物である。適切な距離を取れば襲ってくることはない。不幸な事件は、おそらく偶然間近で遭遇し、お互いビックリすることで興奮したヒグマに襲われたと思われる。今回の登山者は走っていたとのことで、逆にヒグマの方が襲われると思ったのではなかろうか。いずれにしてもヒグマが生息する山に入山する場合は、先住者にこちらの存在を知らせるために、タマヨけ鈴や大声を出すなどの注意が肝要である。 (平)